

在米日本人「移民地文芸」覚書（7） 「大地の市民」—— 外川明と故郷創成神話

糸 井 輝 子

はじめに

本稿は「在米日本人『移民地文芸』覚書（4）『太い根が必要だ』——外川明の自由詩戦前編——」¹に続くものである。本稿では1942年春に実施された強制立ち退き・収容からマッカラン・ウォルター法（1952年移民帰化法）の成立前後までを扱う。外川明（1903－1980）の同時代の日記²と強

1 「在米日本人『移民地文芸』覚書（4）『太い根が必要だ』——外川明の自由詩戦前編——『白百合女子大学研究紀要』43号（2007年12月）87-105。なお、覚書には、「在米日本人『移民地文芸』覚書（1）アメリカの「亡者」——翁久允の長編二部作『悪の日影』と「道なき道」』『白百合女子大学研究紀要』41号（2005年）117-134；「在米日本人『移民地文芸』覚書（2）『我が名を』永遠に一自由律俳句と直原敏平」SELLA 35号（2006年）15-26；「在米日本人『移民地文芸』覚書（3）『かへらぬふるさと』——下山逸蒼の自由律俳句』『白百合女子大学言語・文学センター言語・文学研究論集』7号（2007年3月）53-63；「在米日本人『移民地文芸』覚書（5）『石は直角する』——加川文一の自由詩探究』『言語・文学研究論集』9号（白百合女子大学言語・文学研究センター）（2009年3月）55-65；「在米日本人『移民地文芸』覚書（6）——加川文一の労働詩」SELLA 38号（2009年3月10日）37-53がある。

2 日記はUCLA 特別資料室に所蔵されている“Akira Togawa Papers, 1921-1980”にある。外川明の日記は、その期間の長さ、記述の緻密さ、そして読みやすさの点で、一人の呼び寄せ移民の日記であるという以上に、日本人移民社会の記録として貴重なものである。また移民地文芸にかかわった人々の人間関係を知る上でも興味深い。期間的には、渡米前の1921年から最晩年の1978年まで、半世紀以上に及ぶ。内容的には、家庭の出来事、文芸仲間をはじめとする日系人社会の人々との交友、日々の商売が記録され、日常の喜怒哀楽が素直に吐露されている。感情が吐露され、詩想が記されている点で、外川明という「詩人」の作品を理解する上でも、重要である。

制収容所時代に発行された『ポストン文芸』³および『詩と随想 蜜蜂のうた』（アポロン社、1962年）を主な資料として用いる。

外川明は、日米開戦までには、アメリカ合衆国（以後アメリカと略記する）社会に「太い根」を張ろうとしていた。日本人移民の多くも、「市民権を得る資格のない外国人」とはいえ、外川と同じように、アメリカ市民の親として、善良な合法的居住者として、アメリカに永住する気持ちを固めていたはずである。故郷を懐かしむ心とは別に、アメリカにホームを築こうとしていた。しかし戦争が始まり、強制収容された生活の中で、日米戦時交換要員としての日本帰国申請が受理されるようになると、さまざまな事情から約2万の人々が帰国申請を行った⁴。しかし、日本が敗戦すると、帰国申請した人々も、その多くはまた心変わりして、アメリカでの生活再建を目指すようになった。一方、外川は、戦中も戦後も、アメリカに永住する覚悟を変えることはなかった。

戦後、全米日系市民協会（Japanese American Citizens League, JACL）⁵は、一世の帰化権獲得を運動方針の一つに掲げ、一世は財政的に二世のこの活動を支えた。永住を決意していたものの、外川は運動には積極的ではなかった。1952年に移民帰化法が改正され、日本人もアメリカ国籍を得られるようになってからも、日本国籍を捨て、アメリカに帰化することはなかつ

3 『ポストン文芸』（ポストン文芸協会、1943年5月-45年9月）は、『日系アメリカ文学雑誌集成』（東京：不二出版、1998年）8から12巻に復刻・収録されている。

4 日米戦時交換船が最初に実施される予定となった1942年10月21日ころの申請者は2800名に過ぎなかったが、おそらくは忠誠登録や徴兵の影響で、1944年10月15日には約2万に増加した。Dorothy S. Thomas and Richard S. Nishimoto, *The Spoilage: Japanese-American Evacuation and Resettlement during World War II* (Berkeley: University of California Press, 1946) 58-59.

5 アメリカ日系人市民連盟、日系アメリカ（人）市民協会などと訳される。二世の団体ではあるが、一世への差別撤廃や公民権運動に積極的にかかわった。詳しくは、JACLの歴史書であるビル・ホソカワ著『120%の忠誠 日系二世・この勇氣ある人々の記録』有斐閣（1984年1月）参照。

た。外川は、「大地の市民」であればよいとしたのであった。一般に移民/エスニック史では、移住からアメリカへの定住という、一方通行の同化パターンで歴史が描かれる。外川の場合も永住したという点でこの図式に合致するかにみえる。しかし、彼がアメリカに築こうとした故郷は、アメリカとの一体化ではなかった。本稿では、故郷への想いと、現実の生活の厳しさと、詩作への夢のあいだで揺れ動く外川が、自分は、アメリカ市民ではなく、「大地の市民」だと主張するに至るまでを追う。

強制立ち退き

『詩と随想 蜜蜂のうた』（1962年）は、外川明の二番目の詩集である。しかし、『詩集』（1932年）に収められた詩も再録されている点を考えると、彼自身が選んだ作品集成と呼ぶべきものであろう。この詩集全体は、渡米から出版当時まで、8つの「その頃」に分かれており、強制立ち退き・収容時代の項は「その頃（六）」となる。

その最初に収められた詩、「路傍石語」⁶の冒頭には、

砂漠は広過ぎた

土も砂も乾き過ぎてゐた

どこに捨ててよいのか？

私達のこの涙…………

日記帳にはこれだけしか書いていなかった

6 「路傍石語」は『コロラド新報』に発表された。投稿後なかなか掲載されず、詩が長すぎたのかと1942年9月15日に案じている。9月21日の日記に、ようやく掲載されて、「うれしかった」と記している。強制収容所到着から、おそらくは8月末ころまでの収容所生活を詠んでいる。『ポストン文芸』の最終号、1945年9月号、2-6でも収容所時代の「回顧録」として発表されている。

そして立退いて来た私達だ
常春の南カリフォルニアから
此処炎熱のアリゾナへ
建設した過去の一切を精算して……。 [『蜜蜂のうた』 259-260]

と、ある。この詩では「私達のこの涙………日記帳にはこれだけしか書いていなかった」と詠んである。

しかし実物の日記帳には、レターサイズほどの大きさの紙面に、細かい字でびっしりと強制立ち退きの日、1942年5月29日、の出来事が記録されている。日記によれば、朝3時半に起床、荷物を貨車に運ぶが、カーペットを一枚盗まれてしまう。8時半に汽車に乗り込むとき、「スマイリングクラブ」(婦人団体)がコーヒーを配ってくれた。この小さな親切に、感涙してしまう。汽車はセージブラシの野を進み、やがて

草木も生えてゐない赤い山黒い山の間を縫って行けども行けども砂漠である。砂漠は果なく広くそして乾き過ぎてゐて我々の涙のこぼし所もないやうだ、少しばかりの涙は皆々吸ひ込ましてしまう。泣いてたまるか、泣くまいぞ

と外川は自分を奮い立たせる。車中で、昼食と夕食をすませる。パーカーの町に6時に着くが、その後バスに乗り換え、ようやく「キャンプ」に着く。しかし、長旅にもかかわらず、ベットは用意されていなかった。「六つのマトレスを麦藁で作らなければならなかった事は力ぬけがした泣くに泣けない思ひであったそれに麦藁も思ふやうに手にも入らず知らぬ所の暗い所で」作業しなければならなかった。その後荷物の受け取りに行くが、そこは「実に実に物凄い雑沓であった。」ここで一日の記述は終わって

いる⁷。

到着した翌30日には、マットレスを全部作り直す。収容所はまだ建設途中でであり食堂ではゴミ箱の蓋で調理しているような有様であった。テーブル、椅子、棚さえもない、何もない不便きわまりない生活も、「何も彼も戦時だ」と諦めるより他はなかった [1942年5月30日、31日]⁸。

とはいえ、日記には日米の政府を非難する言葉はない。彼にとって、日本とアメリカは、「生みの親と育ての親」であった [1942年2月19日]。開戦直後の日本軍の「快進撃」にも、「面白くもない」と思う。「両国に恩のある俺だ」からである [1941年12月25日]。

開戦直後、外川是最悪の事態を覚悟した。開戦翌日の12月8日には、「遂に来るべき最悪の事が来たのだ涙も出ない」とせっぱ詰まった想いを記している。資産が凍結され、逮捕者が続出する状況に、将来を案じて、夜も眠れない。「此の国の政府に対して悪い事は決してしては居らぬが若しも何かの間違ひで拘引されても死だけは覚悟してゐる。恐ろしくはなくなった」と、ついには死まで覚悟してしまう [12月9日]。「明日は地獄か？」 [12月10日] と案じた後に、営業が続けられると知ったときには、「助かった、商売をやらせてくれさへすればこんないい事があるものか」と喜んでいる [1941年12月12日]。14日の日記の欄外には、「天は自ら助くる者を助

7 貴家志ま子は、収容所到着日の様子を、『ポストン文芸』1944年9月号に詳述している。その記述によれば、霧のように見えたのは、砂埃であった。到着後、自治制をとると告げられた。持参の写真入り身分証明書を提示したうえに、指紋を押され、アメリカへの忠誠の誓いをさせられた後に、ようやく割り当てられた部屋に行くことができた。1部屋8名の定員だったので、2家族で住むことになった。床には土埃が「二寸」積もっていた。腰掛けすらなかった。「罪なくて懲らしめらるるもの怖じに／似たるおもひに立てる部屋のなか」と志ま子は詠んでいる。28-30。なお外川の日記の表記では、句読点の用い方が必ずしも統一されておらず、また現在の用法とも異なるが、原文通りとした。

8 貴家によれば、300人分を調理する食堂に、包丁は一本のみ、ボランティアは、持参のポケットナイフで皮むきをしたという。「ポストン生活印象記」『ポストン文芸』1944年12月、38。

く、此の真理もくつがへされる日が来たか？ 諸事終わり、と思ったがやはり未だ天は俺に働けと命じるのだ働かう」と記している。

次々と有力商店主が拘引され、「日本人を市場から放逐する」という噂に、「デモクラシイの国」だからあり得ないと思う半面、「暗い気持ちとなる」[1月14日]。やがて強制立ち退き、収容が実施されるとの報道に、「如何なる我々の運命ぞ？日本の政府からは見放され、此処米国政府からは邪魔物扱ひされ、何を便りに[ママ]何を希望をかけて生きて行くのか？さすらいの民ジプシイにも似た今日の在米日本人ではある」と思う。しかし、このように書き続けるうちに、外川は、必ず、「神の命ならば甘んじて受け生きられる所まで生きやう」という信念を記すのである[1942年1月23日]。そして「こうした時にだ大きな悟りを開いて神への感謝を失はずに」と自己を叱咤激励するのであった[1942年1月29日]。その後も日記には、先行きへの不安のなかで、運命を受け入れ、日々を精一杯頑張ろうとする言葉が繰り返される。自分の置かれた立場で日々を生き抜くこと、それが外川の信条であった。

強制収容所

「タイムのウエースと云ふ事が一番苦痛」[1942年4月24日]の外川にとって、「此処に来て二週間ただぼんやりと過ぎてしまった」[6月12日]ことは苦痛だったはずである。「馬鹿になつてみやう思ひ切つて大きな馬鹿にならう」[同上]と思わなかったら、やりきれなかったであろう。外川は、不満を抱くとき、「馬鹿になる」と自らに言い聞かせることで、不満の暴発を押さえたと思われる。日記にこの記述が散見されることは、鬱積した不満や不安が絶えず外川を苦しめたことを意味する⁹。実際、夜ごと就寝

9 「路傍石語」の第五節には「やつぱり下駄を拵へてゐる／馬鹿になれ、馬鹿になれ！／と云ひながら……。」と詠んでいる。

中に大声で叫んだそうである〔6月9日〕。収容所の生活で、「タイムと金に拘束されない人間の一人」〔同上〕になれたとはいえ、外川にとっては監獄に収監されたも同じであった。無心の下駄作りに励むことで、宮本武蔵の無我の境地を想像し、自己の平静を保たなければならなかった〔6月10日〕。そして、当時の心境を、前述の「路傍石語」のなかで、「鈴蛇がゐる／サソリがゐる／蜥蜴はいくらでもゐる／暁の空に響き渡る／カヨテの吠え声の物凄さ」と砂漠の生活を詠んだ後、「何んでもいいのだ／兎に角私達は生きるのだ／生き抜かなければならないのだ」と続けた。そして、

収容所の人々よ！

壊された過去の幸福も

現在のお互いの不自由も

悲嘆せずに耐え忍んでゆかう

そして只管〔ママ〕祈るのです

地球が幸福を取戻す日を……………。

と詠んでいる。

7月3日、砂嵐が襲う。その光景を

雲か霞か雨か？東方の山が見る見る包まれてしまった。雷雨だろう、と思つてゐる間に冷い風が吹いて来たそのうちに砂煙を運んで、風は恐ろしい勢で吹いて来た。戸毎に戸を閉めて家に閉ぢこもる。吹く吹く吹くひどい速力で向ひの家も見えなくなるまで砂埃を吹きまくる、かたく口を閉ぢて黙々とその光景をながめてゐたのだ、富子は泣く、汗は流れる息苦しくなる。これも又加州では味はふ事の出来ない出来事である。一時間ばかりで止むには止んだが、シャワーに湯もなかつた。

と日記に記している。日系人のあいだで、悲惨さの象徴のように語り伝えられてきた砂嵐の体験を、外川はこれもまた「加州では味はふ事の出来ない」体験だと、前向きに捉えようとしている。もちろん、自分の地区のシャワー室には湯さえもなかったという表現に言外の不満が読み取れる。翌4日はアメリカの独立祭であった。「我々の立場から考へる時、何を祝し何を喜ぶ可きであるか」とのみ記している。書き始めれば、鬱積した不平不満が噴出して来るからであろう。

砂嵐はその後頻繁に、激しく、襲う。しかし8月16日、砂嵐の翌朝に、雁が飛ぶ姿を目撃し、「ジーンと涙が湧いて来るやうな気がした」感激を、「夜もすがら吹いた強風が／一面に吹き散らした真綿雲／やがてやがて秋なのだ／一群の雁が飛んでゆく／はるかに高く飛んでゆく」と詩の構想にまとめた。この詩の断想は、「路傍石語」の18節に発展する。

また、カトリックの礼拝に参加し、神父の説教に感激した体験は、9節に詠われた。「路傍石語」は最初の数ヶ月の外川の体験と哀感から生まれたものである。立ち退き収容されて、生活再建に苦しむ人々の生活を見守って、生まれた詩である。「路傍の石の語らひなのだ、誰にも親しく呼びかけたいのだ」と外川は、この詩の題名を思いついたと、8月28日に記している。

夏の終わりのころには毎日曜日には、子供を連れてカトリックの礼拝に参加するなど、毎日がルーティン化してくる。そして初秋の砂漠の自然を愛でる余裕も生まれる。9月1日は、「雲一つなく澄渡つた／水晶のやうな暁／誰が銀鈴を鳴らすものはないか／三つ星が明星が／神々しく輝いてゐる。／故もなくひとり涙が湧いて来た」と詩を構想している。

五時半頃目が醒めたので六時十五分に起きた未だ四辺は暗くて東天は明るくなりかける実に実に美しい空だつたので上のやうな詩が生まれ

たのだ。長い長い間夜の神秘も自然の美しさもあまりしたる「ママ」
機会を持たなかつたから此の戦時を利用してしんみり自然の懷に抱か
れやう。押込められたと思はずに神から与えられら機会だと思つて金々
々を離れた空気をゆつたり呼吸しやう

と、詩心を豊かにする絶好の機会なのだと自らを鼓舞している。そして、
翌9月2日には、「砂漠の秋の夜の空の美しさにすっかりみ惑されてしま
ひさうだ」と感嘆し、ロサンゼルスの中での生活で忘れていた天の川に見
とれ、「星の中に住んでゐるやうな感じだ」と感激を記している。外川は
苦しい環境であればあるほど、日常の小さな美しさを認め、感激する。生
活のマイナス面をあげつらって苦情を言い立てるのではなく、小さな良い
点を評価して、詩心をかき立てる。むしろ、詩心を燃やし続けるために、
強いて小さな美しさに魅了されているかのようにも感じられる。

9月20日は、ブロック46で開かれた「文芸倶楽部」の発表会にも顔を出す。おもには川柳と和歌の人々の集まりで、「大した集まりでもなかつた」と思う。やがてこの集会はポストン文芸協会へと発展し、月刊の『ポストン文芸』を発行するようになる。また、座禅会にも参加し、「誓つて万物を照らすこと、誓つて万物を生かすこと、誓つて万物を拝むこと、さうだこの三つの心構えが必要なのだ、それが宗教の要素であり、又俺の詩の要素であるのだ」[9月22日]と、宗教の精神性と自分が詩で目指そうとしている点の一致を喜んでいる。「心ゆくまで自然にとけ入[り]」[10月1日]、「人生航路の提灯となるやうな詩」、「もつともつと此处で深いものを書きたい」[10月6日]と願うのであった。

時間的にはロサンゼルスで野菜の卸売りをしていたころよりも余裕があるはずであったのであるが、実際にはつぎつぎに問題が生じ、詩作は必ずしも順調ではなかった。流行の下駄作りや「アイアンウッド」掘りに外川

も、最初はつきあいから始め、やがて、熱中する。10月28日には、ホイットマンや、シンクレア・ルイスを読み、聖書も読みながらも、「詩も書きたいと思ふが、頭は空っぽである」のであった。「バラクキヤブテン」として、さまざまなミーティングに出席し、食堂スタッフらの対立を調整し、教会や学校の設立を手伝い、その上で、さまざまな催しを見物したり、参加したりする。プライバシーのない収容所の一室では、「長いこと詩囊が空っぽ」[10月9日]なのは仕方がないことであつたろう。

そのような状態で、ポストン収容所全体を巻き込む「ポストンストライキ」が起こった。食料の横流しなどの収容所運営に対する疑惑や施設の不備に対する不満、将来への不安、「密告」に対する怒りが底流にあった。11月14日に「イヌ」が何者かに殴打され、嫌疑者数十名が逮捕され、うち2名が収容所外で裁判を受けるために移送されることになった。住民側は公正な裁判が保証されないと移送に反対し、当局と折衝するが不調に終わり、住民側はストライキに入った。各ブロックの「代表」は裁判を受けるはずの二人が収監されている「ポリスステーション」の前で、焚き火をたき、氣勢をあげた。「大和魂」「八幡大菩薩」ののぼりをたて、軍歌を流して、「騒いでゐる群集の三分の二はヤジ気分であり、お祭り気分であつて」[11月20日]と、外川は冷ややかに騒動を見ていた。そして、「何かしらん空虚な気持だ、かうして全キャンプの人々が火を焚いてたむろしてゐることが馬鹿々々しい気持さへする」と、これまで数ヶ月のあいだ努力して築いてきた「切角 [ママ] の平和が乱れて来たやうに自分には悲しくさへ思はれる」[11月21日]と嘆いた。外川自身も、焚き火のための薪を運んではいたが、商売人である彼にとっては、ストライキの結果、4000人が5ドルずつの減収となれば、日系人全体で2万ドルの損失になる、「愚かな」行為としか思われなかった [11月30日]。

12月12日、5歳の娘の「紫色の巖山から」のぼる「いびつな太陽」の絵

に触発されて、4 節からなる詩を書き上げた。思えば、娘は、

何処へ行くのか知らずに
長い長い砂漠の旅を
シャーリイ・テンブルの人形一つを抱いて
汽車に詰め込まれて来たお前は
自家に帰る、！ロスアンゼルスへ帰りたいと云つては
幾度父母を困らせたか知れなかつたが
よく灼熱地獄を生き抜けて来てくれた
大分痩せたお前ではあるが
病気にもならず
かうして毎日幼稚園に通ひ
砂漠の中の生活をも喜ぶやうになつたので
父はどんなに嬉しいか知れないのだ。

と記した。「病気にもならず」と書かれてはいるが、娘は当初は、収容所の食事をまずいといって食べようとしなかった。そして、娘も、そして外川自身も、他の人々と同じように、激しい下痢に悩まされた¹⁰。幼い娘には、市民でありながら、敵性外国人と同列に扱われ、「貧民窟」¹¹とも例えられた収容所に押し込められた生活を、外川は長く記憶して欲しいと願う。

幼い吾子よ！此の変つた生活を
深く深く記憶してゐておくれ

10 砂漠の水の悪さと、暑さのために食物が傷みやすかったのである。

11 貴家1944年10月、5。

おそらくお前の末永い一生涯にも
二度とはくりかへさないだらう此の生活だ
そして父母と共に神様に祈ませう
お前の描いた山の上のいびつな太陽が
大きくまん丸くなつて
全世界の人間の胸々に
平和な光を注ぎ込む日の
一日も早く来るやう祈りませう。

収容所の記憶が、やがて平和を希求する心に成長すると信じたのであろう。
詩作しながら外川は、こうして無事に生きていることを、すなおに育っ
ていることを感謝して、「熱い涙」をこぼすのであった。

開戦から1年、死を覚悟していた当時を思えば、「このボストンの生活
も決して不愉快なものではない」と思えるようになる。「集団生活もいい
ものだ」と思えば、「さうした気持が人生で最も尊いものであらう」と納
得できる。そして、「此の気持を押し広めて行つてこそ全世界の人類が一
緒に幸福になれるのであると思ふ」と1942年を締めくくっている。とはい
え、そりのあわない個人に対する嫌悪感も日記には綴られていることから
判断すれば、外川にとっても、和の心を保つのは至難であった。

外川は、戦局や故郷について、自分の力でどうすることもできない辛い
現実には、強いて考えないようにしていたと思われる。日記には、1943年
1月3日まで、これらに関わる記述はほとんどみられない。それでも、
1943年「正月」の静まりかえった山々を前に、故郷山梨の光景を思い出し
たのであろう。「瞬間今まで忘れてゐた事が一度に頭に押寄せて来た」。そ
して、自分がアメリカにいることも、収容所にいることも、日米が戦って
いることも、「何も彼も不思議でならないやうな気がした」のである。し

かし父母や末弟のことを案じれば「俺はたまらなくなつて来る」のであった〔1943年1月8日〕。

JACLの城戸三郎が「一般の二世の意見も聞かずに、政府で徴兵してくれるなら日本人は喜んでそれに応召すると云ふ手紙を出したとか何とか？」¹²ということで殴打された事件も、日記には記録されている〔2月2日〕が、生活はそれなりに安定していた。泊良彦をはじめとする昔の文芸仲間との文通も再開され、『ポストン文芸』も創刊された。「そして眠つてゐた俺の詩心も眼をさまし」〔2月14日〕、日記には、詩の断片が書かれるようになった。

1943年1月28日、ヘンリー・スティムソン陸軍長官が、二世だけの部隊の創設を宣言し、そのための「忠誠登録」が2月にはポストンでも始まった。収容所を混乱させ、家族を対立させたこの登録について、外川は、

二世の十七才以上の男子の登録が始まった。心にもなき忠誠を強いられる彼等の立場には同情すべき点が多い。遠い遠い所でやってゐる戦争も次第に身近に感じるやうになって来た。

と記している〔2月18日〕。しかし、それ以上の考察は展開されていない。なぜ「心にもなき忠誠を強いられる」と外川が考えたのか、説明はない。外川の平和思想がそう書かせたのであろうか。あるいは、「敵性外国人」として強制収容所に入れられた二世が、市民権を無視した国家のために戦場に行くはずがない、という思い込みだったのだろうか。

「忠誠登録」の結果、無条件の忠誠を誓い、それが認められた人々は、

12 サブロー・キドは開戦当時のJACL会長である。開戦後、フランクリン・D. ローズベルト大統領に、戦争協力を約束する電報を打った。しかし、二世の忠誠心を示すための軍務を希望する声明を出したのは、マイク・マサオカの主導によるものであったという。ビル・ホソカワ、213-229。

軍隊に、あるいは職探しに、学業にと、収容所を出て行った。残っているのは、老人と子供である。ある演芸会場で、外川は「遺骨の入営」という浪花節に涙する女性を見た。彼女の長男は家を去り、次男は志願し、三女はタイピストの職を求めてシカゴに出所してしまった。「男勝りの頑丈な彼女の背には未だ運命にひしがれてしまはない強さ残つてゐるが彼女のこの運命は非常時在米日本人の縮図のやうな気がして俺の方が泪じ [ママ] まされてしまうのだ」と外川は日記に記している [5月26日]。

「在米日本人の縮図」とは、アメリカで生んで育てた子がアメリカ社会に巣立ってしまい、自らは日本人の収容所に取り残されている日本人移民の姿である。アメリカ市民である我が子のところについて行けるだけの「アメリカ性」がない親の姿である。世間的には気丈に振る舞っているが、我が子を失ったも同然の寂しさから、浪花節の語りに我が身を重ねて涙する。その女性の姿に、外川自身も我が身を重ねるのである。このころ、外川は、「骨が疼く 心が疼く／時ならぬ北風は剃刀の刃を含んでゐる／自殺したいやうな悩ましさに／脳髓をかきむしられる」という、外川には珍しい絶望的な詩を書いている [5月22日]。

アメリカに無条件の忠誠を誓わなかった人々はツーリレーク隔離収容所に送られることになった [7月28日]¹³。日本行きに署名した人々もいる。ボストン文芸の主導者であった石川凡才は、交換船で日本に帰国するよう日本政府から「指命 [ママ]」があり、「身一つで帰る」のだという。外川は、何十年もアメリカに暮らし、「少しの未練もないのであらうか」と記している [8月23日]¹⁴。外川であれば、なんとしてもアメリカに留まっていたであろう。メンバーには隔離収容所に移送される者もあり、外川はボストン文芸協会の今後を案じている [同上]。

13 「百万弗の費用をかけて実に馬鹿らしいことである」とその日の日記に記している。

14 結局、石川は交換船には乗れなかった。

外川の日記には、「止めてしまはうかと思つても断念しきれない書くこと」[1943年7月15日]、「詩を書かなければさびしくてならない」[7月18日]のに書けない焦り、「ガチリ！魂に触れる言葉が欲しい」[7月19日]のだが見つからない言葉に、砂漠の暑さが加わって、鬱積する不満といらだちが記されている。宗教的にも満たされない記述が繰り返される。やがて、秋になり、モズの姿に着想を得て、「するどい切実な詩を書いて見たいと思ふ」[10月16日]。

切実に探し求めても
魂の糧の得られぬ日に
私は心を百舌鳥にして
冷たい秋空を引裂くばかりに叫びたいのだ。

中略

剣客の如き憎々しい面構へ
然し 彼もまた真剣な真理の探求者だ
飄々として常にただ孤り
寂寥の梢から梢へ飛び回り
それでも
何物も探し出せぬ日に
大空の空虚さに堪へられなくなつて
ああして鋭く啼くのだと思ひたいのだ。

中略

此の砂漠の中まで飛んで来たモズよ！
珍しくお前の声を聞いた日に
それでなくても人数の減つた私達の部落から
三名の若い人達はツールレーキへ行き

一人の老婦人は脳溢血で突然他界したのだ
みんな みんな好人ばかりだったのに……

この「百舌鳥」は外川にとって、「可成り鋭いもの」であり、書き上げて、「さはやかな気持」になれた詩であった。詩友が去ってゆく淋しさに、皿洗いや掃除の仕事をする若者が減って仕事の負担が増すつらさに、外川も大声で叫びたかったのであろう。「好人」なのに、不忠誠の烙印を押されてツーリレークに行く人々、「好人」なのに収容所で死んでしまった老女、「……」に外川の鬱屈した感情が滲んでいる。この詩は、

故里に柿の色づく今頃だが
モゾよ！ 父母や弟は無事でゐるだらう？
モゾよ！ 戦争は何時まで続くのか？
生別と死別の悲しみを交々感じながら
お前と一緒に大空へ鋭く高く叫びたいのだ。

で、結ばれている¹⁵。

終戦と収容所閉鎖

1944年12月17日、強制立ち退き命令が解除され、翌18日には収容所閉鎖方針が発表されたが、外川は出所したいとは思わなかった。行き場のない病人や老人の世話にあけくれていた。本土が空襲され、硫黄島が失われ、沖縄戦が始まった。そうしたなかで、4月7日、外川は「梢の祈り」を書いた。

15 この詩を読んだ友人から、好意的な書簡を受け、外川は「背のまろみ」を1943年12月に書いた。『蜜蜂のうた』297-300に収録されている。

前略

伸び過ぎた落葉樹の 梢の寂しい胸中は誰も知らなかった。

この土だ！ 草や樹を育んでくれる同じ地球の土が
無限に人類争闘〔ママ〕の鮮血を吸ひ込んでゐるのだと想へばたまら
ない。

燦々たる朝陽に 全身の若芽をふるはせつつ合掌し
朝な朝な 大空に平和を祈る 細くも折れない楊柳の梢である。

〔『蜜蜂のうた』 335〕

大地は野菜を育て、果物を実らせる。農民として育ち、野菜や果物の卸売りを生業としていた外川にとって、大地とは命を育むものであった。その大地で人が殺し合いを続ける。血が流れる。流れた血を、大地は「吸ひ込んでゐる」。吸い込むという表現に、流された血は受け入れざるを得ない大地への哀感が感じられる。殺戮を大地は嫌悪しているはずだ、という想いが込められている。「大空に平和を祈る」「梢」は外川である。「細くも折れない」という表現に、血まみれであっても、その大地以外によりどころがなく、その大地以外に自らのかてを得る場所のない、それでもなお希望を求めて祈らざるを得ない外川の切実さがくみ取れる。現状を直視しつつ、現状を否定せず、現状のまま、それでも生きて行くという、外川的生活信条がくみ取れる。

外川が願っていた日米対等の講和は絶望的になり、日記には憂鬱な心境が綴られている。8月7日、原爆が広島に投下された。「アメリカで初めて使用したアトーニツクボンブと云ふ新爆弾」を使って、「これを盾にとつて日本に降腹〔伏〕を強要し」ていることを、「何にしても気持ちの悪い

こと、毒ギヤス使用よりももつと非人道的なものである」と日記に記している。翌日には「ロシヤ」が参戦し、「日本の最後の日が近づきつつあるやうな不吉な気持ちがぐんぐんと押しよせて来る」、「たまらない」気持ちを抑えられない。そして8月14日、

覚悟はしてゐたものの遂に最悪のものが来て見れば、悲しみは余りにも大きい。世界が三角になつたやうな気がする。前途は真暗である。慟哭しても叫んでも何としてもこの悲しみはまぎらすことは出来ない。夢だ、夢だ、現実の出来事とは思はれないのだ。茫然自失、書く可き適当な言葉もないのだ。日本が中立国スイス政府を通して降伏すると云つて来たと云ふことは、こんどこそは真実らしい。それでも未だ信じられないやうな気がする。

然し静かに静かにこの事を考へる時、物質文明との負が精神的の負を意味しないのだ。死ね死ね死に切れ、そして死んで起き上れと叫びたくなつて来る。弱に徹する事は強くなる事だ。どん底から起つてのみゆるがざる歩みは来るのだ。祖国よ、母国よ、大君よ、国民よ、どん底から再出発だ、平和の中の勝利者とならうぞ。弱くして強くならうぞ。夜の時に一大声明があるといふので皆待つてゐたが来なかつた。

と外川は記している。夜にあると伝えられていた「一大声明」とは、「玉音放送」だったのであろうか。「世界が三角になつた」想いとは、外川の心のどこかに「神風」を期待する気持ちが潜んでいたからであろう。絶望のなかで、精神力では負けないのだと思い直すところに、明治の日本人男性の気概が窺える。とはいえ、翌15日には、「祖国か母国がもう無くなったも同然だ」と嘆き、17日には、「一切は諦めたつもりである。それでも時々溜息が出る。死んだつもり、死にきつたつもりでも白人達の顔を見る

と内心馬鹿にされてゐるやうな憶想「ママ」が湧いて来る。」と、敗戦国民となった劣等感を記している。アメリカで排斥されつつも、自分を支えてきた日本国民としての誇りが崩れたのである。

8月下旬、ロサンゼルスに戻ることを決意した。住宅難は想像以上で、下見に訪れた高野山大師教会のホステルは、「WRAの寝具の古いのにシーツもなしにスシ詰めだ」った〔8月26日〕。それでも、外川にとって、「自動車の前に展開する懐しい風景を見てどうしてこの加州から離れることが出来やうか、加州は美しい所だ、いい気候だ、人間の排斥はあっても自然はこんなにも美しく静かに和やかに万人を同様に迎へてくれる」場所であった〔8月27日〕。

やがてメキシコ人の野菜店の手伝いをするようになる。小売店の手伝いではなく、戦前のように七街の青物市場で卸売りをしたいのであるが、「敗戦国民の一人として凡ゆる「ママ」屈辱に耐えてゆかなければならぬのだ」った〔10月11日〕。戦時景気に潤った市場に行けば、商売人の感覚が戻ってくる。外川は、「外国人の儲けたはなしはなし「ママ」そして日本人は皆その機会を逸してしまつて未だハウス、仕事と悩んでゐるのだ」〔10月13日〕と、収容所に押し込められ、繁栄から取り残された焦りを漏らしている。

それでも、好きな野菜や果物を前にすれば、

前略

最低の給料で果物野菜屋の働きを初めたが「ママ」

嘆くまいぞ、悲しまいぞ、心は高く持つてゐやう

柰榴がある葡萄がある林檎がある

豊富な秋の果物を美しく並べて

俺は秋の色彩を満喫してゐるのだ

貧しさはない悲しさもない敗戦もない
南加の果物は今も変わらずに豊富である
蜜蜂が無花果「ママ」の汁を吸ひながら
刺すことも忘れて蜜に酔つてゐる
おお黙々と働くことよりほかに知らない幸福者よ！

という詩想が湧いてくる〔10月19日〕。「敗戦の祖国」〔同上〕を想い、日々の仕事に精出すのであった。

ここで詠まれている「蜜蜂」は店頭で目撃した情景であろう。しかし、「蜜蜂」は『蜜蜂のうた』という題名が示すように、外川自身でもある。敗戦は外川にとって、辛いけれども現実である。それでも、店頭に立って働くかぎり、カリフォルニアの豊かな秋の実りに囲まれていることができる。辛い現実も差別も忘れて、蜜蜂のようにカリフォルニアの実りの豊かさに酔いしれることができる。

「大地の市民」

1946年2月28日から3月4日のJACLデンバー大会では、人種の別なく、アメリカに忠誠を誓うすべての人に帰化権を付与するよう求めることを運動方針の一つとした¹⁶。帰化権、すなわち市民権獲得は在米日本人の悲願であった。日本国民にアメリカへの移民枠がないのも、一世が農地を所有できないのも、日本国民が「市民権を得る資格のない外国人」だったからである。中国人には、連合国の一員として、戦時中の1943年に帰化権を与えられていた。一世指導者はJACLの活動を財政的に援助することを目的に、1947年2月にロッキー山脈東部諸州で、ついで北カリフォルニア州で帰化権期成同盟を結成し、募金活動を開始した。しかし、日系人の高まる

16 ビル・ホソカワ、299。

期待とは裏腹に、人種による帰化権制限撤廃はマッカーラン・ウォルター法が成立する1952年へとずれ込んだ。戦後、米ソ関係は急激に悪化し、世界各地で戦乱が続き、国内的には、共産主義の脅威をあおるマッカーシズムが吹き荒れていた。こうした状況下で、帰化法案は国内の治安問題とからみ、トルーマン大統領の支持が得られなかった¹⁷。

外川は、日系人の帰化権獲得運動には冷ややかであった。頭をさげてまで市民権を求めようとはしなかった。1949年2月11日に、

所詮はアメリカの土となる可き命であれば喜んで与へるものなら喜んで貰つても良いがくれ惜しみたるもの、日系人からの運動がなければアメリカ人自ら覚醒して悪い法律を改革しやうとしないのであつたら無理には欲しくない市民権であるのだ、地球の市民権だけは神から与へられてあるのだから。

と記している。外川は、1949年5月24日、21歳の若さで戦死した弟を偲んで、「誰を恨んでも仕方はないが／若い弟よ何故戦死んだ」、「くれるいやなら貰ひたかないよ／俺にや地球の市民権」と二つの断想を日記に書き付けている。発表するつもりのない詩想であった。二つが並べてあることを考えると、反戦の想いと、国家という組織に拘ることへの嫌悪が感じられる。一個の人間として立派に生活しているという自負も感じられる。

そして、1951年1月5日には、外国人登録に反発して、

人を馬鹿にしてゐるぢやないか、また再外人登録をしなければなら
ないとか？……こんなにも平和な世界を……何故戦争戦争とさはぎ立
てるのか。

17 同上322-330；長江好道『日系人の夜明け』（岩手日報社、1987年）209-229。

人類の凡てが地球の市民であり、神の愛の子であるのに……外人外人と呼び呼はれ、そして市民権を欲しくも与へるとか与へないとか心配するなといふことよ、皆々同じやうに大地の土くれの一つになつてゆくのだ、大地の市民になるのだ、誰彼人種の区別などになしによ

と日記に記している。人種や国籍を理由に壁をつくることへの反発である。最後の2行は捨てぜりふのようにも響く。

「梢の祈り」で外川は、大地は万物を育むものだと表現した。この日記の記述では、大地は、万物が還る場である。アメリカ市民であれ、日本人であれ、大地に還れば、同じ「土くれの一つ」になる。一切平等である。しかし、アメリカ国家の中では、外川は、「市民権を得る資格のない外国人」のままである。家庭を持ち、友を持ち、市場に店を持っている合法的「生活者」であるにもかかわらず、法によって、市民権から除外されている「外人」にすぎない。「市民」と「外人」を区別し、人種で区別する。その区別する意識から「戦争戦争とさはぎ立てる」心性が生じるのだと、外川は考える。人種や国籍を問題にする市民権などありがたがる必要はない、と外川は考える。人はみな「地球の市民」のはずであるからである。

しかしこの「地球の市民」という考え方、「神の愛の子」という考え方は、現実には観念においてのみ主張されうるのであって、生活の場ではまだ夢想にすぎない。平等の世界は「地球の市民」である時には実現しない。「地球の市民」として何十年も善良な隣人としてアメリカ社会の建設に貢献してきた日本人移民の存在をアメリカ社会は認めようとしない。

ここで、JACLのように差別是正に向けて市民運動を展開する方法もあるであろう。けれども外川は、市民権を与えてくれなくても「心配するなといふことよ」、と帰化法案の行方を案じる人々を突き放す。アメリカ市

民であろうと、「外人」であろうと、すべての人が、例外なく、やがては「土くれの一つになつてゆくのだ」、と外川は、現実の人種差別を嗤うのである。「土くれの一つ」という表現に、アメリカ市民だ、白人だ、と尊大に構えていても、所詮は小さな土塊でしかないのだ、という批判精神が感じられる。

しかし、外川の思考は、死んだら「土くれの一つ」という発想で終わっていない。「大地の市民になるのだ」と続く。死んで体が解体した結果の「土くれ」から、万物を育む「大地」になる。死ねば人はみな同じ運命が待っているのであるならば、どこにしようとも、どのような身分であろうとも、大地に根を張って、上を向いて生きて行こう、という姿勢が生まれてくる。それが「心配するなといふことよ」なのである。ここにアメリカの生活者としての外川の自信と誇りがある。人生至る所青山有り、の心境である。

おわりにかえて

1952年7月1日、外川はマッカラン・ウォルター法の成立をつげる新聞記事を日記に張り付けている。法案は6月27日に大統領の拒否権を乗り越えて議会を通過していた。日本人移民待望の帰化権獲得である。しかし、日記には何のコメントもない。外川にとって1952年の最大の関心事は故郷再訪であった。しかしその故郷は訪問するための場所であった、帰って行く場所ではなかった。かれが「大地の市民」として還って行くのは南カリフォルニアの大地であった。

外川は、心情的には、故郷を捨てなかった。けれども物理的には、アメリカに家庭を築き、アメリカの「大地」を自分の還る場としたのであった。しかし還る場はアメリカの「大地」であって、アメリカ合衆国ではなかった。彼の視線は、国家という壁を越えていた。